剣筆

日本鉱業株式会社 社長
佐々木（ささき） 陽信（たかのぶ）

剣縁

季節感のない南方のこととて、定かではないが、昭和十九年秋も末頃であったと思う。サイゴン郊外ショロンの南方第二陸軍病院の営門を、足取り重く出て征く徒手の部隊があった。ビルマ部隊の入院兵士が病傷状の如何を問わず独歩患者である限り、悉く原隊復帰を命ぜられ、漸く九死に一生を得て脱出したあの苛酷な戦場に再び身を投ずるのだ。しかもその大半は復帰すべき、己の原隊が既にあろう筈もないのを承知の上である。

その数日前該当の一員として、爪、髪を封入したそれとなき覚悟の便りを留守家族に出した私が図らずも要手術患者として、数少い担送患者と共に病院残留組となったのである。

これはたまたま、同病院に軍医少尉として在任した渡辺豊輔君の格別の配慮によったものであろうことは、直感したが、時既に君は他病院へ転属していた。

戦場における死生は寸秒寸尺の間に決する。渡辺少尉との奇遇なかりせば、ビルマ反攻最終部隊の一員に加えられ玉砕の運命にあったのである。

小生が野戦病院から当病院に移送されて間もなく、年一、二回の行事である病院長以下全軍医の回診があった。その最後尾あたりの一少尉が、ベッドに正座している私と、膝前に展げてある病床日誌とを見較べながら、俄かに小声で『佐々木先輩！姫高剣道部にいた渡辺です。またあとで』と一瞬の間に通り過ぎて行った。大学時代コーチに行って、合宿を共にして以来の邂逅である。

その日から君が転出して行く迄の間、君の個室が私の病院生活を通じての唯一の寛いだ自由の場であった。『先輩、命を大切にしましょう。お互いに戦争以外でも少しは役立つ身です。』君が他病院に転出する際、ラム酒を交わしながら残していった言葉である。ビルマ兵士総退院のことを知り、君が既に私の為に工作をして呉れていたとは知る由もなかった。

終戦後、君の駒込病院時代、当社道場で剣を交えた後など、会う毎に、このことに触れると、『何とか残って貰い度いと願う気持ちはあったが、あとは先輩の運ですよ。』と云うのみで取合ってくれない。本人の口から経緯らしいことをはっきり聞いたのは悲しいかな、君がこの世を去る僅か九日前、長崎医大病院の病室に於てである。

アフリカに居る筈の君が帰国し病篤しと聞いて馳せつけたのは昭和四十八年六月八日であった。長崎はもうすっかり夏で、夾竹桃が花盛りであった。鮮烈な思い出の日である。面会謝絶の病室の外で暫く待たされた。この間に恐らく用意されたのであろう。重態で横臥の儘と思っていたのに、君はベットに端座して、目をガーゼで拭わせながら私を迎え入れた。しかし左手はベッドの足方の鉄枠に結び付けた帯紐をしっかり握って上体を支えている。右手を挙げて『やー佐々木さん』と何時もの低い太い声である。その右腕内側には点滴の管がつながっている。『よく遠い処を！何しろ栄養はこの細い針一本からとる丈ですから、よくまあ今日まで保っているものです。』こともなげに先方からの挨拶を受けて、トッサには答える術もない。痩身鶴の如くだが、骨太の腕にはまだ竹刀を握った名残がある。静かな清々しい眼、情熱を秘め乍ら淡々と語る口調は、とても命旦夕を自ら知る人のものとは思えぬ。四方山の話のうち、こと陸軍病院の件に及ぶと『運がよかったのですよ。一少尉丈ではどうにもならないことだったが、話の分る人事担当が居て頼みを引受けて呉れたのです。』とあく迄御自分の功とはしない。

この間に病室に出入する看護婦には『サッキの尿量は?』とキットした医大教授の声となる。『何瓦でした』『ソウカ』医師としてその数値は病状の一つのバロメーターであろう。患者と、その生命の苛なまれて行く道程を見届ける医師とが同一人格に併存しているのである。看護された夫人の御心中は如何ばかりであったろう。

病室の壁に『灼けし地に医の礎は定まりぬ』の文字が掲げてあった。友人が書いた熱帯医学に献身した君への讃詞である。この句に正対し乍ら君の話はケニヤに及ぶ。こちらもザイール・エチオピアの鉱山を開発している。ひとしきり話題はアフリカに移るが、こちらは最后の対面というギコチなさから抜け切れない。君には何の蟠もない。彼地を遠く目で追いながら、新しい熱帯医学への愛着を語る。さればとて格別の気負いもない。人事を尽した安心立命の境地というか、平常心というか、含笑入地の高僧の姿を君に見たのである。

君が医学者として教授として、いやむしろ人間として、新しい熱帯医学の創設に、学生の指導に、大きな足跡を残し、真に悔ない生涯を送ったればこそ到達し得た心境であると只々敬服の他ない。

君を見舞ってから約十日後、御本人の渡辺豊輔名儀差出しの封書を受取って一瞬ハットした。果して君が生前用意して印刷させ、死亡日時のみを夫人に追補させた訣別の挨拶状であった。そのままご披露する。

御挨拶

拝啓

皆様お変りありませんか。私は此の四月六日胃癌の手術の為、急にアフリカから緑の美しい日本へ送り還されて参りました。然し医者の不養生から手術は既に手遅れで、皆様より一足お先にあの世に参る事になって了いました。

日鉱体育館で稽古に励む筆者

短くて長い、辛くて楽しい人生でした。殊に最後の数年間は、日本最初の外地に於る「綜合的熱帯医学研究所」の建設「新しい熱帯医学は如何にある可きか?」の構想の仕事に当らせて頂きました事は、私には此上ない光栄でありました。ケニア日本両政府間の折衝は完全にまとまり、あとは設計、人事等の最後の仕上を待つのみとなりました。此であとは諸先輩、同志の皆様におまかせして安心してあちらへ参る積りです。勿論戦前の様な植民地的熱帯医学でもなく、又現在澎湃として日、米、欧に起りつつある様な学問的搾取の医学でもない、「我々は同じ人間なのだ」との意識に立った温い新しい熱帯医学であります。

私程多くの良き師、良き友に恵まれた仕合わせ者はないと思います。お一人〳〵お手紙す可きですが、もう入院来一月余り注射のみで生きて居る体、その体力がありませんので失礼します。生前の御厚誼を深く感謝致します。遺族は妻、兼親友、兼愛弟子の麗子(46歳)一人でございます。

ただ気がかりなのは誕生後僅か六年の若い病理学教室のみです。今向学心に燃えた若者が十人以上集っています。何卒よろしく御指導お引立ての程お願いします。

敬具

五月十七日

渡辺豊輔

死亡日時

昭和四十八年六月十七日　一時四〇分

命矣（ナル）夫。斯人也有（ニシテ）斯疾（ルコトノ）也。痛恨至極のことである。

同君逝いて既に十年、アフリカのど真中、ザイール国にあるわがムソシ銅山の病院長には、ここ数代長崎医大熱帯医学教室から派遣を願っている。僻遠瘴癘の地で二万余の従業員とその家族が、不安なく生活できるのも、剣縁の余慶である。

この他剣道を通じて、多くの畏敬すべき師友を得て今日に至った。省みるに私の人生はことごとに剣縁の恵沢による。有難いことである。

剣縁機妙、剣縁無尽、剣縁無量。

註記　渡辺豊輔君略歴

剣歴　姫路高校、東大剣道選士、六段教士、九州医師大会優勝

医歴　昭和十七年東大医学部卒、応召軍医、東大病理学教室、滝野川病院、長崎医大、腸管病理学専門コレラ研究で著名

主著『腸炎』（共著）